

武蔵野日曜聖書集会 祈禱会

天国の灯火

——マタイ伝第25章1～13節——

1973年4月15日

小池辰雄

御霊のある信仰 キリストわがうちに

【マタイ25】

1 このとき天国は燈火を執りて、新郎を迎えに出づる十人の処女に比うべし。2 その中の五人は愚にして五人は慧し。3 愚なる者は燈火をとりて油を携えず、4 慧きものは油を器に入れて燈火をともに携えたり。5 新郎、遅かりしかば、皆まどろみて寝ぬ。6 夜半に「やよ、新郎なるぞ、出で迎えよ」と呼わる声す。7 ここに処女みな起きてその燈火を整えたるに、8 愚なる者は慧きものに言う「なんじらの油を分けあたえよ、我らの燈火きゆるなり」9 慧きもの答えて言う「恐らくは我らと汝らとに足るまじ、寧ろ売るものに往きて己がために買え」10 彼ら買わんとて往きたる間に新郎きたりたれば、備えおりし者どもは彼とともに婚筵にいり、而して門は閉ざされたり。11 その後かの他の処女ども来りて「主よ、主よ、われらの為にひらき給え」と言いしに、12 答えて「まことに汝らに告ぐ、我は汝らを知らず」と言えり。13 されば目を覚しおれ、汝らは其の日その時を知らざるなり。

●御霊のある信仰

マタイ伝25章1節から。

1 このとき天国は燈火を執りて、新郎を迎えに出づる十人の処女に比うべし。

「このとき」というのは、「トテ」(τετε) というギリシア語ですけれども、非常にマタイ伝にはたくさん出てくる。

天国は燈火を執りて、新郎を迎えに出づる十人の処女に比うべし。

と。非常に、何といえますか、目に見るような光景ですね、「燈火を執りて」というのは、燈火を携えて新郎を迎える十人の乙女、

2 その中の五人は愚にして五人は慧し。

これは「頭がわるい、頭がいい」という「愚か」という意味ではない。「慧〇し」というの



は信仰に基づくところの天的な智慧です。

3 愚なる者は燈火をとりて油を携えず、⁴ 慧きものは油を器に入れて燈火をと
もに携えたり。

要するに、「油があるかないか」ということですね。灯火が灯っている時には油があるんだけれども、それが足りなくなる。大事なものは、この油の方です。

5 新郎、遅かりしかば、皆まどろみて寝ぬ。

眠気をもよおして眠ってしまったわけです。

6 夜半に「やよ、新郎なるぞ、出で迎えよ」と呼よばわる声す。⁷ ここに処女みな
起きてその燈火を整えたるに、⁸ 愚なる者は慧きものに言う「なんじらの油
を分けあたえよ、我らの燈火きゆるなり」

灯火が消えるような、そういったのは観念信仰。それから、自分の信仰を何ものかと思って、一生懸命でやっているような信仰、これがその「油のない」信仰です。「油のある」信仰というのは、これは御霊のある信仰です、言うまでもなく。御霊が即ち、尽きざる御霊である。油は尽きざる油です。

みんなが持つている油は有限なんだけれども、本当の油は無限なんです。我々が頂いているところの御霊は無限の油である。その点でこの譬話以上ですから。この無限の油があつて、キリストにバツと火を点とも○される。

「われ火を投ぜんとて来たれり」

という。キリストの本当の火でもって灯った、即ち聖霊のバプテスマで灯った灯火は、御霊をこつちに頂いていると、これは不滅の灯火である。御霊は無限である。ところが、御霊のない灯火は、自分の力みでもって一応、信仰という灯火になつてしまつたけれども、自分の力みのような信仰という灯火だと、これは本当の聖霊が来てないから、その信仰という灯火は消えてしまう。だから、一般の普通の信仰は、この油なき灯火である。御霊を頂いているところの信仰は、油を持った灯火である。そういうわけだな。

それだから、観念信仰者は、霊的信仰者に向かつて、「灯火が消えるから寄こせ」なんていうわけだ。

9 慧きもの答えて言う「恐らくは我らと汝らとに足るまじ、
分けたら足りない。

10 蜜むしろ売るものに往きて己がために買え」

と。なかなか面白いですね。

10 彼ら買わんとて往きたる間に新郎きたりたれば、備えおりし者どもは彼と
ともに婚筵こんえんにいり、而して門は閉とぎされたり。¹¹ そのほかの他の処女ども来り
て「主よ、主よ、われらの為にひらき給え」と言いに、¹² 答えて「まことに
汝らに告ぐ、我は汝らを知らず」と言えり。



非常にはつきりしていますね。

「いわゆる信仰、これはみんなキリストは、知らないと言う」

というんですね、やがて消えてしまうような信仰は。新郎キリストが、

「キリストを迎えようとする者は、聖霊がなければ、キリストを迎えるわけにいか

ない」

というわけです。聖霊のないような信仰では、キリストは迎えられない。それで、あわてて「聖霊」と言つて、今度は買いに行つたところが、もう時既に遅しで、天国の門は閉じてしまう。

終末的な世を迎えるにあたつて、クリスチャンというのも、いわゆる油のないクリスチャンはレツテル信仰。油のある信仰は不滅の灯火。暫定的に灯っている灯火か、永遠的に灯っている灯火かは、聖霊があるかないかで決まる。

●キリストわがうちに

私たちは、「新郎」^{はなむこ}というキリストを迎えようとしている人生であります。地上にある時

にいらつしやるか、あるいは、みんな天界へ行つてから世の末を待つか、というわけですが、要するに、この我々の人生はキリストの再臨を待つところの人生です。再臨のキリストを、新郎を迎えて、この最後の大饗宴に、天国に入っていく。

ですから、私たちの旅路は、この聖霊の灯火を持って歩かなくては。いつ、どんな夜になつて暗くなつても、これは消えない。非常にはつきりしている。だから、

「聖霊のある信仰か、聖霊なき信仰か」

それによつて、このキリストを迎えられるか迎えられないかということが決まつてしまうわけです。

そうなるというと、なるほど観念信仰ではダメだと。無限の聖霊を頂いている者は、いつでも、いついらつしやつても、

「はいっー」

と言つて、喜んで迎えることができる。そういう意味において、私たちはもの凄いキリストの再臨があるうと、「ハレルヤー！」と言つて、お迎えができる。こういうわけですから、毎日毎日の生活が非常な平安です。必ずキリストに迎えられるところの平安です。それは自分の何かではない。平伏して御霊をいただく。いつも言っている通り、十字架によって無とされた私たちの中に聖霊という灯火が灯つたわけです。

自然の私たちは、昼は太陽の光、夜はそういったランプ、電気のランプ。これで自然の私たちは光の世界を持っています。太陽の光と夜のランプ以上に、御霊の光、御霊の灯火、これが一番大事なんです。

「日月照らすを要せず」



という世界がやってくる。

「神と羔こひつじがその光である、宮である」

という。神・羔のこの驚くべき光の国に迎えられる私たちは、自然現象的なただの光ではしようがないので、

「どんなに暗いなかでも、どっこい、この灯火は消えませんが」

という灯火を持つて、人生行路を歩いて行く。だから、もうはつきりしている。御霊がなかったら、私たちはもたない。御霊があれば、行き詰まりを知らない。どんなに暗い所も、冷たい所も、暖かく明るくして行ける。これが御霊の灯火を携えているところの五人の乙女。これが新郎キリストを迎える本当の態勢である。

非常にこのすつきりした譬話の、終末信仰とまた終末的な現実とを我々に示していると
ころの…(異言)…ですから、

「信仰の何のかんの」

と言うよりも、御霊を受けとることが信であるということなのです。

「キリストわがうちに」

という事態です。うちなるキリスト。うちなる灯火。灯火は手に携えている灯火ではない。胸の中に、存在の中に光っている灯火です。

ですから、私たちには影がない。相対的な影はあっても、絶対的な影はないですから。相対的な人間小池は影を持っているでしょう。けれども、御霊にある小池というのは、これは影がない。これが一番根底にあつて在いますから、それで私は本当にキリストに感謝して進んで行くわけです。

絶対恩寵は、絶対無条件に受けとつているところの現実です。これはどう考えてもそうです。それを

「自分の相対的現実がどうであるか」

といて、遠慮してたり、水を割っていたらダメです。このことを本当に受けとつて、俄然、そういうことで行きます。はい、終わります。

